「男、突っ走る！」

第72回

第一稿

作・壽倉　雅

登場人物

木内　雅也（22）	『オフィスツリーイン』代表
国枝　佐代子（57）	市民映画プロデューサー
田所　俊子（61）	市民映画プロデューサー
橋崎　悟（47）	ＷＥＢ会社社長
鈴川　良江（68）	広告制作会社営業担当
黒田　武彦（45）	市議会議員
中根　渉（39）	市長

1　中央交流センター・全景

2　同・ラウンジ

雅也、佐代子、橋崎、田所が話している。

橋崎「現状、新聞記事を見たというエントリーが三名ありました。これが、ホームページのエントリーフォームから来た情報です（と資料を配る）」

雅也「（資料を見ながら）高校の演劇部に入ってる人、吹奏楽部に入ってる人、子どもの頃からミュージカルが好き……やっぱり経験者の人ばかりですね」

佐代子「まあ、経験者の人のほうが基礎がしっかりしてるから、稽古はスムーズに行くけど、市民ミュージカルを謳っている以上は経験値のない人も参加してほしいけどね」

橋崎、ジェスチャーと目の合図で雅也を見る。

雅也「（苦笑して）ですから、僕はやりませ

んって」

田所「前に市民映画撮った時のキャストの中にも、ちょうどオーディションの応募資格の年齢に入ってる子たちには声をかけたんだけどね」

雅也「そういう方が来てくれたほうが、国枝さんも田所さんもやりやすいんじゃないですか？」

佐代子「それはあるけどね。でも、山中さんのキャストイメージもあるだろうから」

橋崎「せっかくなら、オーディションだけでも参加しても良いかもしれないですね。通る通らないは別として、見栄え的にもオーディションは参加者が多いほうが良いでしょうし」

雅也「最低参加人数、十人は越したいですね。そこから、六人に絞るって形で」

佐代子「参加者が多いほうが、いろんな演技プランが見えて良いからね。（と田所に）公民館の空き教室の状況どうでした？」

田所「（メモを見ながら）南公民館と中央公民館、それから北公民館は第三、第四会議室が現状空いてて、真ん中の仕切りの壁をしまえば大きな一つの部屋として使えるわ。実際に舞台の幅を測ってみないと分からないけど、ここのホールと同じぐらいのスペースは確保できると思うわ。ただね、いくら夏祭りのトライアル事業の一環でやってるものとはいえ、空き教室の優先予約や貸出料金の割引はできないって言われたわ」

佐代子「え、トライアル事業なのに？」

田所「公平性に欠けるんだって。だから、他のトライアル事業で採択された団体も同じように、優先予約もできないし、料金の割引もやらないんだって」

佐代子「ちょっとぐらい融通してくれても良いのに。意外とケチなんだ」

田所「今回、補助金が五十万でしょ。それで、公民館の使用料も含めて、いろんな経費を概算で計算してみたんだけど、結構ギリギ

リになりそうよ。概算となると、絶対途中で必要になってくる備品とかがあってそれを払ったら、自己資金の二十五万と補助金の五十万じゃ足りない可能性も出てくるわ」

橋崎「舞台って結構かかるんですね。僕には全然そういうの分からなかったです」

佐代子「総額七十五万で市民ミュージカルをやるのは、本当現実的じゃないのかもしれない。プロのスタッフや業者に頼んだら、それだけで何十万も飛んじゃう。でも市民ミュージカルとして、私たちが手前味噌でやってるから何とかできるだけで……本当は皆さんにも、それなりの仕事料をお支払いしなければと思ってはいるんですけど」

雅也「今回は補助金事業の一環でやってるんです。僕だって、がっつりこの市民ミュージカルで儲けたいなんて思ってませんから」

佐代子「ありがとう、木内君」

橋崎「協賛とかスポンサー集めは、できないんですか？」

佐代子「規約上、それは問題ないんですって。だから、地元の企業でこのプロジェクトを応援してくれるようなところがないか、心当たりは当たってみようかと思います」

雅也「地元で活動してる人は、そういう繋がりがあるから良いですよね」

佐代子「何言ってるの、木内君だって自分のフリーペーパーのために、地元の企業やお店回って、スポンサー集め一人でやってるんでしょ。それにデザインや記事執筆とかの編集作業も一人でやって、大したもんじゃない」

雅也「専門学校の時から、フリーペーパーは作ってきましたからね。ライフワークというと大げさかもしれないですけど、まあ作ることも楽しみの一つだと思ってやってます」

田所「そういえば、『ぷれいす』は、今どんな状況なの？」

佐代子「そろそろ春号が完成するって」

雅也「十一月に創刊号ができて、すぐに春号の準備でしたもんね。次は夏号に向けての準備もしないといけないですもんね」

橋崎「夏号できるのかな？」

雅也「え？」

橋崎「だって、夏といえばちょうどミュージカルの本番でしょ。僕ら、本番近くなったらこっちの準備に追われて、『ぷれいす』どころじゃなくなるんじゃないですか？」

雅也「大丈夫でしょ。僕は記事を書く仕事がありますけど、スポンサーは良江さんが取ってきてくださってますし、國村さんや伊藤さんがメインで動けば」

佐代子「そうよね。私もスタッフとして編集会議には参加してるけど、私は配ったりお手伝いがメインで、実質的に中身を考えてるのは國村さんと伊藤さんで、大島さんや木内君がそれに沿って作っていくようなもんだもんね。正直、私や橋崎さんがいなくても何とかなりますよ」

橋崎「まあ僕も、ＳＮＳとホームページの更新ぐらいだから、そこまで負担はないかもしれませんけどね」

雅也「まあ、それぞれにできることをやりましょう。エントリーのほうは、僕もＳＮＳで宣伝したり、興味ありそうな知人に声かけてみますから」

佐代子「うん、ありがとう。よろしくお願いします」

3　喫茶店（数日後）

雅也が、コーヒーを飲みながら『ぷれいす　春号（Vol.２）』を読んでいる――と、そこへ、鈴川が入ってくる。

雅也「良江さん、こっちです」

鈴川「ごめんね、急に呼び出しちゃって」

雅也「いえいえ。早く着いたので、できたてほやほやの、ぷれいすの二号目読んでました」

鈴川「（水を運んできた店員に）ブラックで」

雅也「やっぱり、さすが現場一本の良江さんですね。春号のタイミングで、シニアをターゲットにしてるからって、旅館をスポンサーにして温泉企画としてまとめるなんて。すごく勉強になりました」

鈴川「苦肉の策だったのよ。二号目作らなきゃいけないのに、全然スポンサーも集まらないし、國村さんも伊藤さんも全然スポンサー集めしないから。もう困ったものよ」

雅也「……」

鈴川「あ、ごめん。木内君にこんな愚痴言ってもしょうがないわね」

店員がコーヒーを運んでくる。

鈴川「どう、市民ミュージカルのほうは？」

雅也「国枝さんが中心になって、早速オーディションに向けて動いてるところです」

鈴川「木内君が作ってる、フリーペーパーは？　確か『デイズ』って言ったっけ？」

雅也「ようやくスポンサーが集まって、創刊号が完成するんです。ちょうど昨日、デー

タを印刷会社に入稿して、来週には届く予定です。創刊号なので、市長のもとに表敬訪問に行こうかと思ってるんです」

鈴川「一人で何とか頑張ってるんだ」

雅也「まあ、仕事ですからね。表敬訪問に行こうと思ったのは、『ぷれいす』のおかげなんです。一号目の時に市長のインタビューで取材して、二号目は國村さんたちと一緒に県庁まで行って県知事のインタビューしたでしょ。やっぱり、こういうメディアではそういう地元の主となるべき人の声が重要だと思ったんです。なので、一緒に地元のラジオやってる市議会議員の方に、いろいろお願いしようと思ってます」

鈴川「木内君の中では、『ぷれいす』は良い勉強の場なんだ」

雅也「もちろんです。専門学校の時もフリーペーパーを作ってきましたけど、あの頃はスポンサーがなくて、自社発行だったり学校で作ったりしてましたからね。今回のよ

うに、ターゲットや季節に合わせた特集を組むことでスポンサーを獲得するというやり方、とっても勉強になりました。次の夏号も、ぜひよろしくお願いします」

鈴川「ああ……そのことなんだけどね……」

雅也「……？」

鈴川「私、五月末で大島さんとこの会社辞めるのよ」

雅也「え……」

鈴川「七十超えて、もう最前線はやっぱり体力的にもキツイって感じるようになってね。まあこれからは、カルチャーセンターにでも通ったり、趣味のカメラでいろんな写真を撮る活動でもしようかなと思ってるの」

雅也「……」

鈴川「まだ、『ぷれいす』の人たちには言っちゃダメよ。私が辞めることを知ってるのは、大島さんだけなんだから」

雅也「じゃあ、どうして僕に……」

鈴川「不思議よね、木内君には先に言ってお

かなきゃと思ったのよ」
雅也「今日呼び出したのって、このことだったんですか？」
鈴川「うん。編集部じゃみんながいるしね」
雅也「そうですか……」
鈴川「随分深刻そうな顔してるわね」
雅也「だって、良江さんがいなくなったら、『ぷれいす』はどんなことになるか。正直、スポンサーを獲得できなかったら、あの編集部は成立できません。良江さんがスポンサーを獲得してくださってるから、『ぷれいす』は持ってるようなもんなんですよ。まあ、僕は良江さんほどの営業力もなければ、ここは地元じゃないのでスポンサーになってくれそうな候補も伝手もありませんから、自分でスポンサーを取ってくる力もありません。ただ、仕事だと思って記事を書くしか能がありませんけど」
鈴川「もし『ぷれいす』が無くなったら、その時はその時よ。何もフリーペーパーを作

るところは他にもあるんだし、木内君は自分で作ってるんだもの、それで良いじゃない」

雅也「……」

鈴川「それに、木内君はこれからもっと伸びるべきライターよ。いつ廃刊になるのか分からないようなフリーペーパーのライターでくすぶってたら勿体ないわよ」

雅也「僕なんて、まだまだですよ。スポンサーの店舗紹介にどんな内容を書くべきかを教えてくれたのは良江さんでした。シニアへの取材の時に、ヒアリングシートの案を出してくださったのも良江さんでした。『ぷれいす』で良江さんに会ったことで、僕はどれだけ勉強させてもらったか」

鈴川「嬉しいこと言ってくれるわね。こんな年寄りに」

雅也「本当に、大島さんの会社お辞めになるんですか」

鈴川「私はひっそりと現役を退くの。これか

らは、木内君たちの時代なんだから。私から学んでくれたこともあるだろうし、これからの若い力と発想とアイディアで、また新しいメディア媒体でも作ってよ。応援してるから」

4　木内家・雅也の部屋（夕）

雅也がスマホで話している。

雅也「すいません黒田さん、お忙しい中。実はですね……」

5　市役所・廊下

黒田がスマホで話している。

黒田「うん、うん……ああ、表敬訪問はね、広報課が報道関係者にプレスリリースを出す流れになってるんだよ。そうそう……うん、うん……まあそこは俺に任せといてよ。広報課には俺から伝えといてあげる。一旦市長のスケジュールも確認してみるよ。それを踏まえた上で表敬訪問の日程調整って

流れで。もちろん、当日は俺がちゃんとアテンドに入るから任せといて。はいはい、じゃあまた決まったら連絡するから。うん、お願いします。それじゃあ（と電話を切る）」

6　木内家・雅也の部屋

嬉しそうにスマホを置く雅也。

部屋の端に段ボール箱が積まれており、雅也が封を開ける――桜の木が表紙になった『デイズ』の束が入っており、一冊取り出すと、中身を見ていく。

7　市役所・一階・ロビー（数日後）

スーツ姿の雅也がじっと待っている――黒田が階段を下りてくる。

黒田「ツリちゃん、おはよう」

雅也「おはようございます。今日は、いろいろありがとうございます。表敬訪問の件、本当におんぶにだっこで申し訳ありません。

いかんせん、こういうのは全然分からなかったものですから」

黒田「良いってことよ。言い方悪いけど、市議会議員っていうのは市民に使われてナンボなんだから。こうやってツリちゃんが、俺を頼ってくれるのが一番嬉しいんだから」

雅也「新聞社の方もいらっしゃるんですか？」

黒田「確か今日は、二社来るって聞いてる。新聞記事になれば、また良い宣伝にもなるし、信用にもなるよ」

雅也「写真載る時は、ぜひ黒田さんも一緒に」

黒田「もちろん。せっかくの機会なんだから。（と時計を見て）あ、そろそろ行こうか。応接室は四階」

雅也「はい」

8　同・四階・応接室

雅也と黒田が待っている――職員がお茶を持ってくる。

雅也「ありがとうございます」

職員「まもなく市長お見えになると思います
ので、しばらくお待ちください」
雅也「分かりました」
出ていく職員。
雅也「市長とは、どんなこと喋れば良いんで
すかね？」
黒田「まあ、フリーペーパーを作った経緯と
か思いを話せば良いと思うよ。後は、市長
のほうから質問が何個か来るから、それに
こたえてくれれば。全体の進行やアテンド
は俺がやるから、任せといて」
雅也「ありがとうございます。市長とお話し
する機会なんて滅多にないでしょ。だから
ちょっと緊張しちゃって」
黒田「大丈夫だって」
と、腕章をつけて一眼レフカメラを持
った記者が二人入ってくる。
記者Ａ「失礼します、三河時報です。今日は
よろしくお願いします」
記者Ｂ「よろしくお願いします、東三河新報

です」

雅也「今日はよろしくお願いします」

黒田「（記者たちに）ぜひ、良い記事をお願いします」

と、職員が入ってくる。

職員「失礼します。市長が来られました」

雅也と黒田、起立して迎える――市長・中根渉（39　）が入ってくる。

中根「お待たせしました。市長の中根渉でございます」

雅也「フリーペーパー『デイズ』編集長の木内と申します。本日はお忙しい中、表敬訪問のためにお時間をいただきまして、ありがとうございます」

中根「さ、どうぞおかけになって」

雅也、黒田、中根、それぞれの席に着座する。

黒田「市長、本日は私、黒田がアテンドを担当させていただきます。よろしくお願いします。フリーペーパー『デイズ』は、この

春に創刊をしたわけですが、編集長はこの木内雅也君です。まだ二十二歳という若さですが、地元が大好きで、もっと地元の魅力を発信していきたいということで、自らスポンサー集めだけでなく、デザインや記事執筆と言った編集もすべて一人で手掛けています」

都度、写真撮影をしたりメモをしている記者たち。

中根「そうですか。（と雅也に）魅力を発信していくことは素晴らしいと思いますが、どうしてフリーペーパーにしようと思ったんですか？」

雅也「僕は、専門学校に通っていた時にも、フリーペーパーの制作に携わっていて、やはり根底にあるのは地元の魅力を見つけて、発信するということでした。こんな名所があるんだ、こんな面白い人がいるんだ、こんな美味しいものを食べられるところがあるんだ、と地域を掘り下げていけばいくほ

ど、魅力というのは溢れるものなんだと実感しました。なので僕も、自分が住んでいる地元の魅力を自分自身でも知って、なおかつ地元の人がもっと地元を知ってほしいなと、そんな思いで立ち上げました」

中根「広報はどうしても、中立な立場で情報を発信しなければいけません。民間だからこそ、ぜひ地元の活性剤となり、広報では発信できない魅力的な情報を伝えてくれることを期待しています」

雅也「ありがとうございます」

×　×　×

『デイズ』をそれぞれ手にして横並びで記念撮影をしている雅也、黒田、中根――記者がそれぞれカメラで撮影をしている。

9　同・一階・ロビー

雅也と黒田が歩いている。

雅也「今日は本当にありがとうございました」

黒田「こちらこそ。お役に立てたなら何より
です」
雅也「次は夏号に向けて動きます。またこれ
からも、ぜひご支援ご協力いただけたらと
……」
黒田「市議会の同じ会派の人たちにも宣伝し
とくよ。正直、同じ会派の人たち、六十よ
り上の人がほとんどでね、こういう紙媒体
が好きな年代だからね」
雅也「ぜひお願いします。表敬訪問までした
からには、もっと地元のためにフリーペー
パーを作りたいと思います」
黒田「明日には記事が出るって言ったね、楽
しみだな」
雅也「はい」
微笑み合う雅也と黒田。

つづく